

その他の参考文献

- 一、福田博美「鳥居清長の浮世絵に見る服飾描写の独自性：姿態美と染織表現」文化学園大学紀要 服装学・造形学研究第四十六集
- 二、『大麻比古神社』ホームページ <http://www.oosahikojin.jp/>
- 三、『日本のビジュアル生活史 江戸のきものと衣生活』平成十九年刊
丸山伸彦編 小学館

江戸時代の流行文様「麻の葉」

桃山時代の織と縫を中心とした能の装束にはほとんど見ることができない。江戸時代に麻の葉文様が流行したのは、麻の葉の意匠が、江戸期に入って発達した染の技術に非常によくマッチしたことが理由として考えられよう。

また江戸期に多くの文様が生まれそれらが何らかの形で流行文様へと変わっていったがこれらの理由として一番に考えられるのは江戸の文化が発達した結果だといえるだろう。多くの流行が生まれそれらを江戸の人々が上手く取り入れていったことで様々なことが生まれそこから多くの流行文様が誕生したと考えられる。本稿では流行文様の中から麻の葉文様を選んだわけだが、この文様が流行するに当たり一番影響を与えたといえるのは歌舞伎であるといえる。この歌舞伎の流行は江戸の流行文様を数多く生み出したが、麻の葉文様もその一つで、中でも五代目岩井半四郎が『八百屋お七』を演じた際に着た浅葱色の麻の葉鹿の子文様は「半四郎鹿の子」と名付けられ爆発的な人気を得た。また嵐璃寛が演じた「お染久松」でも麻の葉文様が取り入れられ、「於染型」と名付けられた。これらの歌舞伎で使われた紅色や浅葱色の麻の葉文様を使用したことで江戸の女性たちの憧れになったことが流行文様になる切掛けになったといえる。

このように麻の葉文様が江戸の人々に愛され近代にも長く流行文様として着用された。図5は昭和初期に生産された麻の葉文様を駆使した若い女性むきの着物である。半四郎鹿の子の応用か、紅と黄で染め分けられている。また、これらの流行によって浮世絵師たちの多くが絵に取



図5 昭和初期の着物

り入れたことで多くの江戸の人々が目にする切掛けとなったのである。現代でもこの文様は様々な所に取り入れられ残っており、特に多くみられる物として、着物の襦袢や帯、小物など様々な場所に取り入れており現在も愛される文様であると認識できるのだ。このように影響で爆発的人気呼びそれが火付け役となり現在に至るまで流行文様として扱われるようになったといえる。

注

- 1 金沢康隆著 昭和三十七年刊 青蛙房
- 2 岡登貞治著 平成元年刊 東京堂出版 5P～6P参照。
- 3 熊谷博人著 平成二十七年刊 日経印刷 100P～103P 128P～131P参照。
- 4 早坂優子著 平成十二年刊 視覚デザイン研究所
- 5 神保五彌校注 新日本古典文学大系八六 岩波書店一九八九年刊による。
- 6 『歌舞伎美人』ホームページ <http://www.kabuki-hito.jp/special/ixil/16/index.html>
- 7 丸山伸彦監修 平成二十六年刊 東京美術
- 8 『別冊太陽 日本のこころ』214 浮世絵図鑑 江戸文化の万華鏡』湯原公浩編 平成二十六年刊 平凡社
- 9 『南総里見八犬伝』（全十巻）平成二年刊 岩波文庫
- 10 『浮世絵の女たち』鈴木由紀子著 平成二十八年刊 幻冬社 第二章 鈴木春信の美人画に描かれた看板娘 参照
- 11 『浮世絵八華3 歌麿』昭和五十九年刊 平凡社
- 12 『北斎漫画一』『北斎漫画二』昭和六十一～二二年刊 永田生慈監修 岩崎美術社
- 13 『上村松園』平成三年刊 上村松篁編 日本経済新聞社による。
- 14 大藤ゆき著 昭和四十三年刊 岩崎美術社

はじめて着せられるのであった。〔児やらひ〕とあるように生まれて三日間はまだ人間界に存在すべきものかどうか定かではないと考えられているほど、当時、乳児は育ちにくかったのであろう。

五・二麻の葉と仏教

主に産衣にはうこん染か赤色のものが好まれたようである。赤は紅花で染められてもので、これらの色が好まれた理由として挙げられているのが最初に赤色の着物を着ると、その後はどんな着物を着ても似合うと言われたためというのもあるが、ほとんどは魔除の意味合いを持つていたとされている。また麻の葉文様が好まれた理由としては、成長がはやく、すくすく育つという意味のほかにも、この文様がX字形や目かごなどの魔除に使われている幾何学図形と似ているからではないかとも考えられていることから麻の葉文様と幼児との関係は根強いものであると推測できる。

また奥村氏の論文でも麻の葉文様と幼児との関係性の事が考えられており、その中では植物の麻との関係ではなく、仏教関係の文様から幼児の衣服文様として移行されたその後に、植物の大麻と結びつけられたのではないかと述べている。これらの理由としてあげられているのは、仏教が庶民に広く信仰されるに従い、現世利益的信仰がますます強くなり、子育てを願う信仰が多かったことが、幼児の生育の願いを込めて行われる、産衣における民俗にも仏教的意味が加味されていくのではと考えられておられ、麻の葉文様が魔除文様として使用されるようになったのもこの仏教的信仰要素からきていると考えられており、幼児の保命長寿のため、あらゆる障害を取り除く文様、即ち魔除文様とされたのではとある。これらの考えで挙げられているのが、密教についてだ。密教において、「童子経法」といったものが存在し、これは、幼児の保命長寿の爲の法が存在しているとある。この時に行われる加持・祈禱の際に子育ての信仰の対象とされる、乾闥婆王、不動明王像、曼荼羅、尊像などを用いて行われしく、これらの文様に麻の葉文様が見られここから子供の衣服へと転移させたのではとある。また奥村氏はこれらの仏教的信仰要素と並行して地藏信仰を挙げておられ、平安後期にはすでに盛んな信仰が

みられ、地藏信仰と子供との関係が強調されるようになっていったことから、子供地藏、子育て地藏などの信仰が江戸時代には特に盛んであったとされている。このように子育ての尊像の衣服文様から幼児の生育をたすける文様として認識されるようになり定着していったのではと考えられている。

これらの考え方で見ると、確かに麻の葉文様の名がついたのも麻の葉に似ているということからで、元々ある文様に後からつけたもので、麻の葉文様がすくすく成長するという意味が込められるようになったというだけで子供の衣服に用いるには関係性が薄いとも感じ取れ仏教的信仰の後に言われたのではないかと考えられる。よって、奥村氏が考える仏教的信仰で麻の葉文様が使用されたことから幼児の健康などを願ってこの文様を用いるようになり、後に大麻の成長のはやさなどが付け加えられて麻の葉文様が魔除文様として取り入れられ幼児の健康や長寿を願い、幼児の産衣に取り入れられていったというように推測できる。また本稿で奥村氏の論文に付け加えるとしたら、現代では仏教的信仰要素が残っているとは考えにくく、単に植物の麻のようにすくすくと育つて欲しいという気持ちが進められて幼児に麻の葉文様の衣服を着させているのが殆どであるが今も昔も、幼児に健康で長生きして欲しいという気持ちは変わっていないということがいえるであろう。

このように、健康や長寿を強く願う気持ちから、この文様の産衣が着せられたのである。実際に多くの浮世絵に描かれる幼児の産衣には麻の葉文様が描かれている事が多く、産衣に描かれていない場合であっても、布団の文様や、手拭い、母親の着物の文様など様々な所に幼児が描かれている浮世絵には麻の葉文様が描かれている。これは、麻の葉文様が幼児に関係していることを表しているのではないかと考えられる事から、麻の葉文様と幼児の関係性があることが理解できるだろう。

六、まとめ

麻の葉文様の歴史は古く神聖な文様として扱われてきているが、安土

とで麻の葉文様と鹿の子しぼりの強い結びつきがわかる。また九編には、麻の葉文様の着物を身に纏った平家物語の仏御前が描かれている。

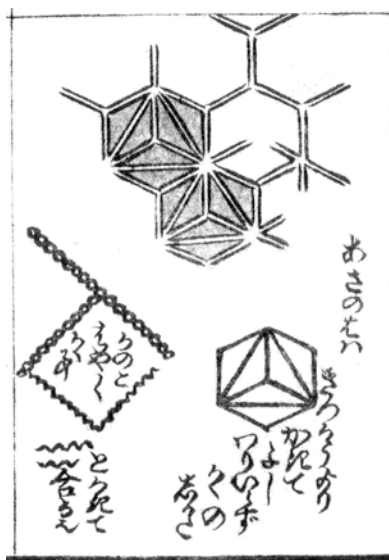


図4『北斎漫画』
「あさのははきつかうよりかきて
ふしわりいらすかくのしかた」

このように、多くの絵師が麻の葉文様作画に取り入れてきたことが理解できた。また絵師たちに描かれる麻の葉文様は下着や、羽織、半襟に描かれていることが多くみられ、それらの色のほとんどが紅色で描かれているものが多くみられた。これは、歌舞伎でみられたように女性らしさを表すために紅色の麻の葉文様を好んだのではないかと推測できる。

四・三近代の画家が描く麻の葉

またこの文様は江戸時代以降も描かれており、明治から昭和にかけて活躍した女流画家、上村松園の絵にも麻の葉文様が数多くの作画に描かれている。¹³松園の画集の中にも六例みられ、この時代においても麻の葉文様が流行文様として扱われてきたことがうかがえる。またこの画集の中に描かれた麻の葉文様は帯と半襟のみであった。

これらのことから麻の葉文様は多くの画家たちに描かれ流行文様として認識されてきたことがうかがえる。また描かれかたとして、主役文様として描かれるというよりは、下着や帯の部分に描かれている作画が多いことから少し覗かせるのがおしやれだったのではないかと筆者は考える。また帯に扱われることが多い面では、歌舞伎の影響が関係している

と考えられる。麻の葉文様は女性らしさを表すのに必要な文様であったと推測でき、好んで麻の葉文様を描いていたことから麻の葉文様が流行文様であったといえる。

五、麻の葉文様と幼児との関係

五・一麻の葉と産衣

一方、麻の葉文様は古くから幼児のための文様として扱われてきている。幼児の産衣の文様に麻の葉文様の着物を着させる風俗的習慣が現在でも残っている地域があることから麻の葉文様と幼児との関係があることが推測できる。この章では主に奥村氏の論文「衣服文様についての歴史的考察」と『児やらい』¹⁴を参考に書いていく。

麻の葉文様は幾何学文様でこの文様は後から麻の葉の形に似ていることから名づけられたが、麻は大変成長が早く、春に撒いた種が夏ごろには数メートルも伸びるほどの植物であったことから、当時は現代のようにならずしも子供がすくすくと育つような環境が整えられていないことから赤子が亡くなってしまふことも多くあり、麻の葉文様の産衣を着せることで、麻のようになすくすく育ち丈夫な子供になるように願いを込めて着させられていたのである。前掲の『江戸文様このみ』によると、万葉集の枕詞に「夏麻引く」は成長のはやさと生命力と「神聖」な意味合いを麻に重ねたとあり、この当時から麻の葉文様には神聖な意味合いや魔除の意味合いがあったことが分かる。また、この章の初めにもあるように、現在でも麻の葉文様の着物の産衣を着せる習慣が残っている地域があり、群馬県勢多郡東村では、「生まれてからうこん色とか青い麻の葉もようの着物を作った。〔『江戸文様このみ』〕とあり、また幼児の一つ身着物の背の中央にお守りとして麻の葉紋を縫い付け背後から魔物が入らないようにという思いを込めて襟肩下に色糸で飾り縫いをするなどがある。またある地域では「三つ目ぎもの」という風習があり、これは赤子が生まれて三日目に行う儀式で、「はじめて生児を人間界へ受け入れる関門とされていた。この日名付けとか初湯の儀式が行われ、初着も

は上手く取り入れていたことが分かった。麻の葉文様を描いた絵師たちはとても多く、浮世絵の元祖とされる、菱川師宣に始まり、浮世絵が全盛期の頃の江戸中期以降には、鈴木春信、磯田湖竜斎、鳥居清長、喜多川歌麿、歌川豊国、葛飾北斎、歌川国芳などの絵師が美人画、役者画、大首画、風俗画、読本の挿絵などに様々な物に麻の葉文様を描いた。

元禄期から寛政期頃の江戸の歌舞伎の様子を記した書物である、『花江戸歌舞伎年代記』の挿絵の多くに松高斉勝壺春亭の絵が使われており、この中に描いた歌舞伎の衣装に麻の葉文様がかかれていると奥村氏の論文にあることから、半四郎鹿の子が流行する以前から歌舞伎の中で麻の葉文様が使用されて来たことが理解できる。

そのほかに曲亭馬琴の小説、『南総里見八犬伝』^②の溪斎英泉が描いた挿絵の中にもいくつか麻の葉文様が見られ、描かれるものは帯や着物がかほとんどであった。また、多くの絵師が麻の葉文様を描かれたが今回は、鈴木春信、喜多川歌麿、葛飾北斎に絞って麻の葉文様を描いた作画の中からいくつか例を挙げたい。

鈴木春信

春信は宝暦十年頃から明和七年まで活躍した江戸中期の浮世絵絵師で錦絵の創始者である。春信の作画で代表作といえる作画の一つである八枚の挿物の中の一つ、八枚揃いの「坐舖八景」は中国の伝統的な画題である「瀟湘八景」を身近な日常の風景に見立てた作画であり、その中の一枚「鏡台の秋月」という作画に描かれている女が着ている着物の下着に麻の葉文様がかかれている。この画は「瀟湘八景」の中に描かれた「洞庭秋月」をふまえて描かれた作品である。この他に、春信は絵巻も多く描いておりその中の一つである「夕立図」や古典の主題を当時に置き換えて描いた見立て絵の中から、「見立て鉢の木」にも麻の葉文様がかかれている。これらの作画の中に描かれている麻の葉文様の特徴として、春信が描く麻の葉文様は紅色で描かれているものが多いことや、麻の葉鹿の子文様よりも基本の麻の葉文様を好んで描いているように推測できる。^③

喜多川歌麿

明和七年頃から文化三年まで活躍した江戸中期から後期にかけての絵師で、美人画が得意であった。歌麿の作品にも、もちろん麻の葉文様が数多く描かれている。その描かれた作画は歌麿の代表作である十二枚揃いの「青楼十二時」は遊女の二十四時間を題材にし、当時の生活や風俗を描いた作画である。この中の一枚である「寅の刻〔図3〕」に描かれる女が着ている羽織に、紅色の麻の葉鹿の子文様がかかれている。また、「青楼十二時」と同じ頃に描かれた作画である太夫シリーズの中に一枚に描かれた「玉屋内若梅」にも中の下着に紅色の麻の葉鹿の子文様がかかれている。また奥村氏の論文を基に調べると「日本風俗図絵」の「絵本江戸爵」、「青楼年中行事」の挿絵の中にも麻の葉文様が見られた。^④



図3 歌麿「青楼十二時・寅の刻」
東京国立博物館所蔵

葛飾北斎

安永七年頃から嘉永二年まで活躍した江戸後期の浮世絵絵師。「手踊り図」に描かれた麻の葉文様は部分的に描かれているのではなく着物全体に藍色の麻の葉文様がかかれている。また、「雪中傘持ち美人図」には半襟の部分に紅色の鹿の子文様がかかれている。どちらも北斎の代表的な美人画の一つである。また北斎は多くの絵手本を発表しており、『北斎漫画(図4)』^⑤の三編に幾何学文様の絵手本が描かれておりその中に麻の葉文様が亀甲から描くことが紹介されるとともに、鹿の子を素早く描くためには並線を描いて合体させる工夫が示される。同頁にあるこ

江戸時代の流行文様「麻の葉」

と浅葱色の麻の葉文様を斜めの段違いにした文様のことでお三輪が片袖を脱いだ時にその文様が披露され、狂乱の場面を表現するのに使用される。また、この衣装では帯の部分にも麻の葉文様が使用され、黒襦子縁の赤い麻の葉文様で、町娘らしさが強調され嫉妬に狂い狂乱する姿が上手く表現されている。

「八百屋お七」の発想を得た物語である「三人吉三廓初買」にも麻の葉文様が登場する。この物語は三人の盗賊の絆を描いたもので、最後の場面でお七と名付けられ女として育てられた女装した盗賊、お嬢吉三が火の見櫓に追いつめられ、黒襦子襟のついた紅色と浅葱色の「麻の葉段鹿の子」の振袖の衣装を身に着ける。

またこの「麻の葉段鹿の子」は女方の衣装だけでなく「仮名手本忠臣蔵 道行旅路の花魁」では鷺坂内内の衣装に使われており、歌舞伎にはこの文様が多用されていることがうかがえる。麻の葉文様は町娘によく似合う文様とされており、女性らしさを表現するには欠かせない文様だということも理解できる。

現在に至るまでこの文様が使われ続けており、歌舞伎の中では、この文様がお七によって強く印象づけられ、町娘らしさを表す文様として重要な役割を果たしていると考えられる。また、様々な種類の麻の葉文様を使い、場面に合わせて文様の配置や色合いなどが工夫されてきていることも分かった。

麻の葉文様が流行文様になるにはこの歌舞伎との関係が大きく影響していると考えられるだろう。それには勿論、江戸時代に歌舞伎が流行した事と当時のファッションリーダーが歌舞伎役者だった事が「麻の葉文様」を大衆に広める切掛けとなり、岩井半四郎や嵐璃寛などの人気役者が演じた場面が江戸の人々の目に焼き付き好印象を与えた事が爆発的な流行文様に姿を変えることになったのだろう。そしてこの歌舞伎の流行によって、更に人々から愛される流行文様になったといえるだろう。

四、絵師が描く麻の葉

四・一 絵師と流行

浮世絵や錦絵など多くの絵師たちが描いた作画は、江戸の流行を知る上で、重要な役割をしている。当時、浮世絵などの中に描かれる、美人画、役者画、遊女画など、数多くの作画が出回っていた。浮世絵や錦絵に描かれる髪型や着物の文様、色合いまで当時の江戸の流行を敏感にとらえているものが多く、現代でいうファッション誌のような感覚に似ていると筆者は考えている。

『浮世絵図鑑 江戸文化の万華鏡』⁸⁾を参考にすると、当時の江戸時代のファッションリーダーは歌舞伎役者や遊女などであった。また、描かれる女性も遊女だけではなく、町娘や、一般の武家の奥方や女中たちなど様々な階層の女性たちを描いており、身分によって服装の違いや流行を知ることでもできたのである。浮世絵や錦絵などに描かれる、着物の柄や、髪型などを江戸の人々は、参考にし、取り入れていたのである。様々な流行文様を取り入れられたが、その中で、麻の葉文様も数多くの絵師が着物や帯など様々な場所に使用した。時代によって絵師たちが描く髪型や表情、着物や帯までも流行によって変遷していることから、絵師たちが流行に敏感であったことがうかがえる。このことから、当時の流行を知るには浮世絵と関係していると推測する。

四・二 描かれた麻の葉文様

また多くの、遊女の顔絵にも麻の葉文様が使用されているが、この当時、遊女の間でも麻の葉文様は流行しており、着物や帯の柄に使用され遊女の間でも、この文様を好んで着ていたことが美人画や遊女画などから、推測される。ここから、本稿の冒頭で紹介した、奥村萬亀子氏の論文を基に浮世絵との関係性を調べていく。

天明六年、「客衆肝胆鏡」には、禿の役をやめ新造女郎として客に接するようになる挨拶に、麻の葉文様の帯をしめて出ると記されている。このように、麻の葉文様が歌舞伎役者や遊女の間でも流行していることから麻の葉文様の流行がうかがえる。こうした流行文様を浮世絵絵師達

すべてが観客の目に印象を与えられへと変わって行ったことが歌舞伎から多くの流行が生まれた理由ではないだろうか。

したがって、流行文様には歌舞伎が大きく影響しており、その流行文様の一つとして麻の葉文様が江戸の人々に広まり、流行文様として認識され江戸の人々に愛される文様となったと考えられる。

三・二 流行の火付け役「半四郎鹿の子」

この麻の葉文様が江戸の後期に、爆発的に流行することになったのも歌舞伎が大きく関わり影響したことだからである。元々、上方の歌舞伎役者であった五代目岩井半四郎が文化六年(1809年)、三月に追善興行を河原崎座で行った。この時行われた「其往昔恋江戸染」^{そのむかしこのえとぞ染}の一幕の中で「八百屋お七」のお七役を演じた際に着た着物に麻の葉文様を取り入れた。この麻の葉文様は鹿の子絞りで出来た麻の葉文様であり、この時にお七を演じた岩井半四郎の名が付けられて「半四郎鹿の子」と呼ばれるようになり、半襟、袖、裾回し、帯など様々な場所に取り入れられ、人気を博した。図2は半四郎が演じた物ではないが三代目歌川豊国が描いた浮世絵で、浅葱色と紅色で「半四郎鹿の子」を描いている。五代目岩井半四郎が実際に着たとされるのは諸説あるが浅葱色の麻の葉鹿の子文様らしい。しかしながら、浮世絵で描かれる「八百屋お七」の作画では主に紅色と浅葱色の二色で描かれているものが多く、元々麻の葉鹿の子は紅色が主流であったことから馴染みのある紅色と流行に影響を与えた浅葱色の鹿の子文様と一緒に描いたのではと考えられる。

また、式亭三馬の『浮世風呂』^⑤にはこのように書かれている。「おやおや、鬚結ひの裁だ、一粒鹿の子かえ、あ、麻の葉もよいねえ、あれは半四郎鹿の子と申すよ、わたくしはね、おつかさんにねだつてね、あのお路考茶をね、ふだん着に染めてもらいました」

このことから、当時歌舞伎の文様や色が流行していることが分かり、麻の葉文様の流行の様子がうかがえる。ではなぜこの五代目岩井半四郎が演じたお七の着物の文様が流行したのかを考察していきたい。

まず今までの麻の葉鹿の子文様の色といえば紅色が主流であった中、五代目岩井半四郎はそうはしなかった。「半四郎鹿の子」の特徴は浅葱

色で染められた麻の葉鹿の子であることだ。この浅葱色の麻の葉文様が人々の目にこの文様を焼きつけた事が流行するポイントとなったのであろう。この「八百屋お七」という演目の中で一番の見せ場である火の見櫓の場面で登場する着物だったことも流行に大きく影響していると考えられる。お寺の小姓である吉三郎に恋心を抱き、もう一度火事が起きれば吉三郎に会えるだろうと思いい、お七が自ら火をつけ火事を起こし自ら火の見櫓に登り火事を知らせるために半鐘を打つ場面での浅葱色の麻の葉鹿の子絞りの着物を着ることで火が渦巻く様と浅葱色の麻の葉文様の着物と対比して人々の目に焼き付き強く人々に印象を与えたことが江戸の人々に麻の葉文様を流行文様として扱われるようになったことにこの「半四郎鹿の子」は大きく影響しているといえる。

また同じころに上方で麻の葉文様が歌舞伎の影響で流行することになる。上方の歌舞伎役者である嵐璃寛が「染模様妹背門松」^{そまようめいせもんまつ}でお染を演じた際に麻の葉文様を用いたことから京都や大阪でも女性の間で人気を博し、これまた役者が演じたお染の名が付けられ「於染型」と呼ばれ流行する。これらの事から歌舞伎では麻の葉文様と関わりが深く、この流行以降、娘役では、襦袢や帯に広く使われており、あどけなさや、可憐な雰囲気を表す町娘の役に欠かせない文様として現在でも幅広く取り入れられている。

三・三 歌舞伎での麻の葉文様

「半四郎鹿の子」や「於染型」など歌舞伎の影響からつけられた麻の葉文様があり、それらが流行文様として扱われたことから、歌舞伎と麻の葉文様の関係は深く、流行文様になるための切掛けとなった。「八百屋お七」、「お染久松」の他にも使われている。どのような場面で使われているのか「歌舞伎美人」^⑥、『演目別歌舞伎の衣装鑑賞入門』^⑦を参考にしてみる。

「妹背山婦女庭訓」^⑧では御殿の場で、蘇我入鹿の妹、橘姫と求女が恋仲になったと嫉妬に狂い、大勢の女官たちになぶられ狂乱状態になったお三輪が藤原鎌足の家来である鱗七に殺される場面に「麻の葉鹿の子」の振袖仕立ての重ね下着が着られている。「麻の葉鹿の子」とは紅色

江戸時代の流行文様「麻の葉」

など様々である。季節は関係なく着られる文様だが、主に夏に好んで着られる涼しげな印象を与える文様である。また、江戸時代に入り流行文様として扱われるまでにそう時間は掛からなかった。これらの理由として挙げるならば、神道との関わりと仏像、仏画など神聖な物の文様として使われてきたことから江戸の人々にとって馴染みが強い文様であったことが理由として挙げられる。またこの文様が江戸の後期に大流行するが、その理由として、歌舞伎と麻の葉文様の関係性が大きい関係しており、江戸の人々から愛される流行文様になって行ったことが分かっている。

これらのことから麻の葉文様が、江戸時代の人々に大きく影響を与えていたことが理解でき、愛される流行文様として幾つかの理由があることから、江戸で広まった理由が理解でき、流行文様として扱われるようになるのも理解できる。

二・二、麻の葉文様の種類

麻の葉文様は一種類だけではなく様々な文様がある。『中国・日本の文様事典』^④、『江戸文様こよみ』によると、麻の葉文様の基礎は正六角形で構成された単独の文様が「麻の葉文様」である(図一)。他にも、「崩れ麻の葉」、「輪違麻の葉」、「松皮麻の葉」、「捻じれ麻の葉」、「網代(あじろ)麻の葉」、「麻の葉小紋」、「麻の葉紋り入り古帛紗」、「麻の葉に向かい鶴」など数多くの種類があるとある。またこの文様は家紋や神紋としても取り入れられており、『文様の事典』によると家紋では主に、「丸に麻の葉文」、「三つ割麻の葉文」、「三つ外割麻の葉」、「麻の葉桔梗文な」、「麻の葉桐」などが使用されている。また、神紋として徳島県鳴門市大麻町板東字広塚にある旧国幣中社大麻比古神社が「向う麻の葉」の紋を使用している。

祭神大麻比古命の後裔が阿波国に到り、麻を播種の基を開いたので、その祖先である大麻比古命が勧請されて祭祀され、その御名と子孫の栽培した麻に因んで麻の葉を神紋とした。(同社HPによる)

このように数多くの麻の葉文様の種類があることから家紋や神紋と

して現在に至るまで麻の葉文様が様々な場面で使用されてきていることから、麻の葉文様が江戸時代に流行文様として人々に愛されていたことが考えられる。また麻の葉文様が誕生した歴史が古いことから江戸の人々にとって親しみやすい文様として受け入れられたこともこの麻の葉文様が江戸の流行文様として広まった理由として大きく影響していることも考えられる。

三、歌舞伎、麻の葉

三・一 歌舞伎と流行文様

歌舞伎と麻の葉文様の流行は大変大きく関わりあっている。当時歌舞伎が大衆の娯楽の中心であり江戸の人々との関わりが深かった。当時歌舞伎役者は、江戸の人々にとってファッショリーダーのような存在であったと考えられる。そのため江戸時代には、歌舞伎役者の名前がついた物が多く誕生することになる。それは様々で、髪型、色、帯の結び方、着物の文様などが生まれ、流行した。当時、歌舞伎の人気役者が着る物



図2 八百屋お七
立命館大学所蔵

装には町人の生活が大きく影響していることが分かる。

江戸中期

繊細な美しさを現し始めたのが中期の特色。中期の服飾は町人の気のゆるみからくる消費的生活の影響から精巧華麗優婉な趣味に彩られた。女性の振袖の丈は長くなり、角袖が流行する。また文様は大柄がすたれ吉宗の儉約政治の影響からか見かけは地味だが、実は贅沢なものが好まれた。これらのほかに、小紋が大流行し、縮織物が喜ばれた。また男は鶯色、女は鶉茶（黄みが強い茶色）や路考茶（黄茶色にやや赤黒みを帯びた色）などの渋い色が好まれた。これらも儉約政治の影響からくる現象である。縮物として八丈縮が大流行し、様々な縮文様ができる。中でも、キシ縮が大流行する。ほかには、仲藏縮は流行の中で生まれ、歌舞伎の人気役者であった中村仲藏の舞台姿から流行していく。少し後には松本幸四郎が着た高麗屋縮、市川団十郎の三筋縮など数々の格子縮が芝居から流行する。また小紋でも歌舞伎から「亀藏小紋」、「市松小紋」が流行した。中期の服装は染物や染色、文様まで、歌舞伎から流行したものが多くみられ、その影響力の大きさがうかがえる。

江戸後期

文化の集大成が特色。町芸者や遊女、歌舞伎役者から多くの流行が発信された。文化中ごろ、夏は黒縹子の帯が流行し、派手好みの女は白地のゆかたに紅絹または緋縮緬の裏襟をかけ、わざと襟を裏返ったように引き返し着る着方が好まれた。夏冬通じて伊予染め、鹿の子が流行し、路考茶染が好まれた。町芸者の贅沢な普段着が市民に刺激を与え、贅沢な衣料を平常服に使用するのが流行する。緋縮緬や友禅文様の襦袢を着るのが芸者や一般女性に多く見られ好まれていた。目立たない色や柄が主流。大柄文様は使われず、小紋や縮が中心であった。帯の色も地味な色が好まれたが、若い娘からは派手な文様が好まれ、半四郎鹿の子などが好んで使われた。後期の服装史においても歌舞伎とは切り離せない程影響を受けており流行には欠かせない存在であったこともうかがえる。ここままで、『江戸服飾史』を参考に時代背景についての概観は一応

終了する。

このように江戸の服装史からうかがえるのは多くの流行があり、当時の生活からくる不安や、安心など感情が服装に影響することもあり、その時々によってさまざまな流行が生れていたことが分かる。またこの時代の流行に大きく影響を与えた、芸者や遊女、歌舞伎役者が深く関わりあっていることが多くの流行を生んだのではないだろうか。大変興味深く感じた点である。

二、幾何学模様、麻の葉

二・一 麻の葉文様の広まり

麻の葉文様は江戸の流行文様の一つであるが、文様自体の歴史は大変古く、『文様の事典』②、『江戸文様こよみ』③などによれば、日本では平安・鎌倉時代から用いられ、仏像、仏画、建築や染織物、漆喰など様々な用途で使われてきた文様である。この文様は、正六角形を基礎として構成した幾何学的文様のことを指し、大麻の葉に似ていることからこの名が付けられたが、初めから大麻をモチーフに作られた文様ではなく、麻の葉文様が出来た後にこの文様が大麻の葉に似ていることから麻の葉文様と呼ばれるようになったように文様自体の歴史は古いことが分かる。

またこの文様は、神道との関わりがあり、この文様を神紋とする神社が存在することも分かっている。麻の葉文様が衣服に取り入れられたのは、江戸時代に入ってからで、着物だけではなく、襦袢や帯、袋小物、

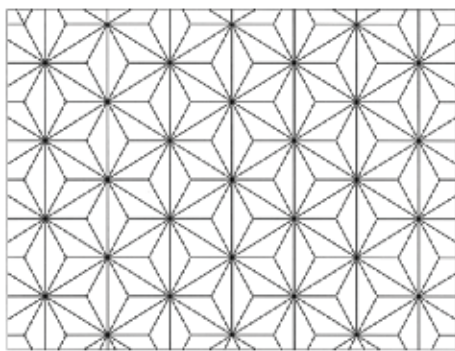


図1 麻の葉文様

江戸時代の流行文様「麻の葉」

はじめに

江戸時代は歌舞伎や浄瑠璃、浮世絵、などの非常に鮮やかで創造的な芸術文化が発達した時代である。これらの事が少なからず影響し、女性の服装にも影響があったといえる。江戸時代に入り小袖が流行ったことにより、着物と呼ばれるようになる。着物には様々な文様が存在するが、季節や環境によって、好まれる文様などがありこれらはどのようにして広まり、流行していったのか。またはどんな風俗的影響がみられるかを本稿で追及していきたい。また今回は多くの文様の中から「麻の葉文様」を特に取り上げることとする。

また、今回の研究では奥村萬亀子氏の「衣服文様についての歴史的考察——麻の葉文について——」（京都府立大学 学術報告「人文」第二十二号昭和四十五年刊）を参考に研究していく。

一、江戸の服装史

はじめに、江戸時代の一般的な服装について知る必要がある。『江戸服飾史』¹⁾という本を参考に時代別の傾向を整理しておく。

幕府の方針などによって衣服や住居などに法令が定められていたため、様々な制限がされていたが、違反した場合の処罰はさほど影響を与えない重いのではなく、むしろ反動で以前にまして豪華になっていった。この時代このような風俗規制はほぼ無意味であったといえる。

このように町人が力をつけ町人文化を確立したために江戸時代の服飾

は町人を基準とする形態が出来上がる。また、町人の間には階級的差別がなかったため、身分的な服装の差別はされなかった。そのため、様式にはその時々々の流行を取り入れるのが当たり前であった。これらの身分関係上での服装の差別がなかったことが江戸の服飾風俗の発展に大きく影響を与えたといわれている。この差別がなかったことや、仕事の際に決まった服装でなければいけないという決め事がなかったことから日常生活に快適で不自由のない服装を好むようになる。こうしたことから小袖形式が服装の基礎として扱われるようになり、これをもとに改善されていくのである。またこれらは一般的な商家に基づくもので、一部の職業などは、それぞれの職業に見合った作業服が発達した。また江戸時代から「小袖」は現代の「きもの」という意味で使われるようになる。

江戸前期

服装に限らずあらゆるものが、室町時代の影響を大きく受けていた。服装の特徴として、武張ったものや、奇抜なものが好まれ、文様なども華麗で大柄のものが流行した。好まれた文様は、幾何学模様、雨・雪・電光などの天象、鳥獣・草木・花卉などの生物、建築物・調度品・小道具などの人工物、文字などを取り入れた文様である。文様の取り入れ方としては、総模様、右肩、右裾を結ぶ上部だけのものなど、その時々々の流行が、自由に配置されていた。文様の大きさも様々で、寛文ごろには直径一尺余の丸文様が好まれ、大胆で豪華であったが、元禄からは小型になり、友禅文様など大柄であっても繊細で優美になった。また歌舞伎役者から広まった「小太夫鹿子」、「千弥染」なども流行する。前期の服

林 美里
(山崎 美紗子ゼミ)